



おそう式のあと、どうして塩をかけるの

けがれを清めるために、塩をかける

そう式に行ってきたあとで、塩をかけるのは、そう式のけがれを取り除いて、身を清らかにするという意味があります。

そう式のあとには、必ず「お清め」が配られます。「お清め」というのは塩のことです。塩をまいて、清めるという習慣は古くから行われており、お寺でのおはらいや神社での祈願にも、塩が使われています。また、すもうをとるとき、力士が土俵に塩をまきますが、これも、けがれをはらうために行うものなのです。

昔は塩水をかぶって、身を清めた

日本では、身を清め、けがれをはらうために、古くから塩が使われてきました。もともと日本人は、けがれをはらうために海水をかぶって、「こり(けがれを取り去るために冷たい水をかぶること)」を行い、身を清めたのです。

海の近くに住む人は、海水をかぶることができますが、海から遠いところに住む人たちは、それができません。そこで、竹でできた水とうなどに海水を入れておき、海に行けないときは、この水とうの中の海水を使ったのです。ところが、水とうの中の海水が蒸発してしまい、中に塩の結晶が残っていることがありました。人々は、海水からとれた塩ならば「こり」に使えろと考え、これが、お清め塩の起源となったのです。(監修・田代 脩)

